

米輸出の動向と展望

主席研究員 藤野信之

〔要 旨〕

- 1 日本は農産物輸入大国だが、その技術力を生かした高品質な農産物の輸出にも取り組んでいる。日本の農産物輸出額は2009年で2,637億円であり、近年増加傾向にある。金額ベースではリンゴ（54億円）、牛肉（38億円）が大きく、次いでナシ（7億円）、米（援助米を除き5億4,500万円、1,312トン）となっている。
- 2 農林水産物全体の輸出先国・地域別分布額の割合は、アジアが70.6%を占め、次いで北米（17.5%）、欧州（7.1%）の順で、アジアが圧倒的に大きい。アジアのなかでは、香港（22.2%）、台湾（13.1%）、中国（10.4%）、韓国（10.3%）となっており、東アジアとその内の中華圏が大宗を占めている。
- 3 日本米の需要要因としては、①アジアの経済成長と高所得層の拡大、②世界的に増加する日本食レストランの展開、③日本米への高評価といった点が挙げられる。
- 4 商業用米輸出の推移をみると、輸出数量は近年アジアの経済成長につれて増加基調にある。金額ベースでも、世界的な穀物価格の高騰を受けた08年をピークに09年は低下したが、全体としては増加基調にある。国別には香港、台湾が圧倒的で過半を占め、ことに香港の増加が著しい。なお、輸出米を「新規需要米」として取り扱う（株）神明の取組みが注目される。
- 5 最大の有力潜在市場である中国の輸入はそのほとんどがタイからのものとなっており、日本産米の小売販売価格は約1,400～1,500円/kgと、現地産日本品種約140～200円/kgの約10倍、現地在来種50～100円/kgと比してはその約15～30倍と高価である。これは、高品質銘柄米が輸出されているのと、日本産米の中国国内小売価格が輸出入費用や卸売・小売マージンによって日本保税庫納入価の2.2倍となることによる。
- 6 SBS米における中国輸入精米の輸入価格が1万円/60kg（玄米ベースでは9,300円弱）程度に上昇してきたことをとらえて、生産調整を廃止して9,500円/60kg程度の米価水準が実現されれば対中米輸出を行えるとの議論もあるが、輸出入費用等を上乗せすれば、中国国内小売価格は2.2倍の2万3千円/60kg（381円/kg）に達し、中国産米との価格差は大きい。2010年の中国産ジャポニカ米卸価は急上昇したが、その水準は4元（52.8円）/kgにとどまる。また、SBS輸入米価格が高いのは、それらが東北3省で生産された対日輸出用の高品質銘柄米であることによる。
- 7 アジアの富裕層は今後確実に増加し、ジャポニカ米需要も一定程度増加するものと考えられる。それに伴って、中国を中心とするジャポニカ米や日本品種の生産量も増加しようが、日本産米の品質の優位性は維持される一方で、その相対的高価格性も持続されるものと思われ、限定的輸出が容易に本流へ移行するとは考えにくい。輸出価格の対現地産品比較劣位は、稲作の持続性、再生産性を保障した上での生産調整廃止が万一実現したとしても変わることはないだろう。

目次

はじめに

1 日本米輸出の位置

2 日本米の需要要因

(1) アジアの経済成長と高所得層の拡大

(2) 日本食レストランの展開

(3) 日本米への高評価

3 日本米輸出の動向

(1) 商業用米輸出の推移

(2) 各輸出市場の概要

(3) 日本国内産地における取組み

4 中国向け市場の動向

(1) 中国における輸入米の推移

(2) 中国における日本産米の評価

(3) 中国における流通実態と小売動向

(4) 中国向け輸出米の価格構成と日本の輸出価格

(5) 中国におけるジャポニカ米の生産動向

5 今後の展望

おわりに

はじめに

日本は世界に冠たる農産物純輸入国だが、一方で、その技術力を生かした高品質な農産物の輸出にも取り組んでいる。国を挙げての取組みは、地方から起こった2003年5月の「農林水産ニッポンブランド輸出促進都道府県協議会」を嚆矢として、05年4月に「農林水産物等輸出促進全国協議会」が設立されることにより、本格的に始まった。全国協議会は農林水産団体、食品産業・流通関係団体、外食・観光関係団体、経済団体、47都道府県知事、関係省庁で構成されている。また、07年を中心に農林水産省の地方農政局（沖縄は総合事務所）ごとに、輸出促進地域協議会等が設立されており、全国段階、地域段階双方からの支援体制が整い、一定の成果も上がりつつある。

もちろん、ニッポンブランドを意識させ、その輸出を促進させたのは、主として

アジア諸国の経済成長に伴う高所得層、富裕層の台頭にある。ことに米は、アジアの伝統食でもあり、高品質米へのニーズは所得の上昇が前提となる。

一方で、近年、日本のミニマム・アクセス米のうち主食用のSBS米における中国輸入精米の輸入価格が1万円/60kg（玄米ベースでは9,300円弱）程度に上昇してきたことをとらえて、生産調整を廃止して9,500円/60kg程度の米価水準が実現されれば対中米輸出を行えるとの議論もある。

そこで、本稿では、主としてアジア諸国の富裕層向けに限定的に発生しつつある日本の高品質米輸出の動向と、主に中国を対象として数量的にも本流となりうる米輸出の発展可能性を、それを成立させる要因とともに検討することとしたい。

1 日本米輸出の位置

日本の農産物輸出額は09年で2,637億円

であり、近年増加傾向にある。加工品を除いて品目別にみると、金額ベースではリンゴ（54億円）、牛肉（38億円）が大きく、次いでナシ（7億円）、米（援助米を除き5億4,500万円、1,312トン）となっている。加工品では、アルコール飲料（154億円）、粉乳（124億円）、緑茶（34億円）が大きい。

農林水産物全体の輸出先国・地域別分布額の割合は、アジアが70.6%を占め、次いで北米（17.5%）、欧州（7.1%）の順で、アジアが圧倒的に大きい。アジアのなかでは、香港（22.2%）、台湾（13.1%）、中国（10.4%）、韓国（10.3%）となっており、東アジアとその内の中華圏が大宗を占めている（農林水産省（2010））。

米に関しては、対台湾、香港が圧倒的に大きく過半を占め、対中国も09年では30トンと僅少ながら増加傾向にある。

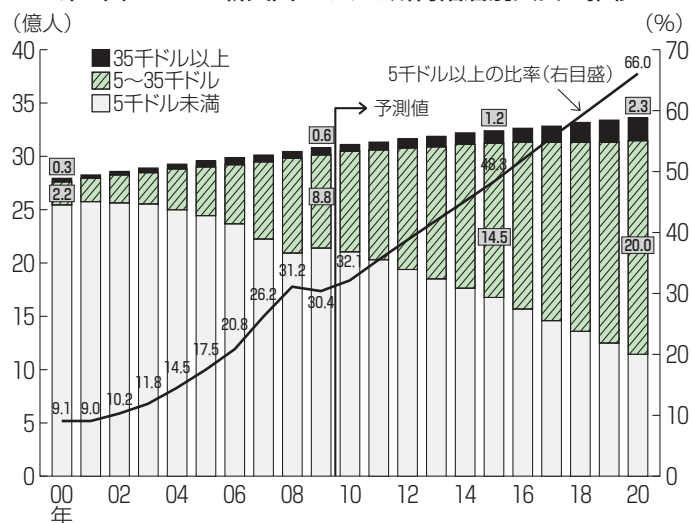
2 日本米の需要要因

(1) アジアの経済成長と高所得層の拡大

1980年に約2兆ドルの経済規模（名目GDP）であったアジアは、2009年には約15兆ドルに達し、15年には約24.4兆ドルと、NAFTA、EUを超える経済圏になるものと予想されている（経済産業省（2010））。また、08年の世界金融危機からの回復ペースも先進国をしのいでいる。

こうした経済成長のなかで、アジアにお

第1図 アジア新興国における所得階層別人口の推移



資料 Euromonitor international 2010

出典 経済産業省「通商白書2010」

(注) 1 世帯可処分所得の家計人口。

2 2009年までが実績値で、それ以降は予測値。

ける中間所得層（世帯可処分所得5千～3万5千ドル）や富裕層（同3万5千ドル以上）が増加しつつあり、09年ではそれぞれ8億8千万人、6千万人で、2020年には各20億人、2億3千万人に達するものと予想されている（第1図）。

富裕層のなかで中国の占める割合は09年で約3分の1、20年では約2分の1となり、国別には中国が重要性を持っていることが分かる（同図）。

(注1) ここでのアジアとは、ASEAN+3（日中韓）+3（インド、オーストラリア、ニュージーランド）。

(注2) ここでのアジアとは、中国、香港、台湾、インド、インドネシア、タイ、ベトナム、シンガポール、マレーシア、フィリピン。

(2) 日本食レストランの展開

07年に試行的にスタートした対中米輸出では贈答品需要が過半を占めたとされるが、日本米の需要要因としては、外食産業、

ことに日本食レストランによる需要も大きな位置を占める。

農林水産省の推計では、世界には2万1千～2万4千の日本食レストランがあり、そのうち、6千～9千がアジアに分布している。日本食レストランの海外普及に関しては、07年に設立されたNPO法人日本食レストラン海外普及推進機構（JRO）が中心となって各種の活動を行っており、14都市（東アジアでは、台北、上海、ソウル、香港）に支部を設けて農産物の輸出促進にも貢献している。

(3) 日本米への高評価

こうした下地の上に、決定的に重要なのが、アジア富裕層による日本米への高評価がある。その内容は、①安全、②高品質、③美味ということになるが、それらは単に生産工程だけではなく、収穫後の乾燥・調製や保管の品質も影響している。

同じアジアの先進国である韓国においても、04年ごろまでの一般普及米は白濁米を含むものが主流で、白濁米を含まない米を完全米（パーフェクトライス）として付加

価値米として扱っていたが、現在では完全米の割合が高まっている。

07年の北京におけるアンケート結果では、日本産米を購入した理由（複数回答）のトップは、「美味しいから（41.2%）」が他の要因を圧倒的に引き離している（農林水産省（2008a））。

3 日本米輸出の動向

(1) 商業用米輸出の推移

援助用と推察されるものを除いた商業用米輸出の推移をみると、輸出数量は近年アジアの経済成長につれて増加基調にある。金額ベースでも、世界的な穀物価格の高騰を受けた08年をピークに09年は低下したが、全体としては増加基調にある。とはいえ、日本全体では1,312トン、5億4,500万円にとどまっている。国別には香港、台湾が圧倒的で過半を占め、ことに香港の増加が著しい（第1表）。

香港では米は備蓄商品として輸出入管理の対象となっているが、輸入量の制限はない（JETRO（2009））。香港の主要輸入先はタ

第1表 商業用の米輸出数量等の推移

(単位 トン, 百万円)

	05年		06		07		08		09	
	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額
輸出合計	634	320	967	427	940	527	1,294	641	1,312	545
うち台湾	413	169	593	161	450	175	453	168	333	115
香港	99	57	155	74	218	119	341	172	481	206
シンガポール	63	35	63	40	92	48	173	81	185	79
中国	-	-	2	7	72	43	90	52	30	14
米国	16	25	128	99	41	71	26	49	17	28

資料 財務省貿易統計(ただし、援助用と推察される数量を除く)
出典 農林水産省(2008a)をアップデート

イが輸入量割合79.6% (09年) と圧倒的に多く、次いでベトナム (6.2%), 日本は増加基調にあるとはいえ7位の輸入国 (0.2%) にとどまっている (UN comtrade)。

中国に対しては、07年4月の大臣級会談で植物検疫条件 (精米工場の指定、燻蒸処理の実施) について基本合意がなされ、第1便として全農が24トン (新潟県産コシヒカリ、宮城県産ひとめぼれ) を輸出して北京、上海で完売した。その際の小売価格はコシヒカリ約1,600円/kg、ひとめぼれ約1,500円/kg、販売チャネルは北京では日系スーパーと百貨店、上海では百貨店とスーパー等、需要 (顧客標的) は中国人富裕層の贈答・自家消費、企業贈答用、在留邦人用等であった。また、12月の同会談で暫定的に150トンの輸出が可能となり、全農が12月と1月に合計100トン进行輸出し、販売網を沿海部等13都市に拡大して販売した (農林水産省2008b)。

しかし、関係者によると追加輸出分は、2月の春節 (旧正月) 後に販売が落ち込み、08年6月末までに約30トンが売れ残り、農林水産省の担当者は「日本のコメは当初、中国メディアも報道し話題となった。春節前後まで企業などが贈答用として購入したが、一般の家庭にまで浸透しなかった」と分析している (08年7月17日付「共同通信」)。貿易統計上では、08年の日本の対中国精米輸出は90トンとなっている。暫定輸出は、全農とCOFCO (中糧集团有限公司) 間のものに限られたが、08年5月には二国間協議がまとまって恒常的な輸出条件が確

立された (農林水産省 (2008a), JETRO (2009))。植物検疫条件の主なものは、①中国側の認可した指定精米工場で精米されていることと、②輸出前に登録燻蒸倉庫で精米に燻蒸処理を実施することである (農林水産省ホームページ)。

(2) 各輸出市場の概要

現在の日本米の主要市場の概要は、第2表のとおりであり、小売価格帯は1,000円～1,200円/kg (6万～7万2千円/60kg) と極めて高く、日本品種等の現地産米価格の2～7倍となっている。

短粒種消費は、台湾で高い (8～9割) ほか、中国北方 (中国全体では2～3割) と米国西海岸地域で大きい。今後は、米消費量が都市部でも約78kg/年・人と多く、富裕層の増大が予想される中国が有力潜在市場になるものと考えられる。

とはいえ、09年のアジアの富裕層6千万人の米需要は、1人平均年間消費量60kgとして360万トン、うち短粒種の需要はその5割としても総量で180万トンに過ぎない。2020年に至っても、富裕層2億3千万人の米消費量は、中国人 (米78kg消費・短粒種消費3割) の割合が3分の1から2分の1に上昇して1人平均65kg程度となり、米需要全体で1,500万トン程度に増加するが、短粒種割合は4.5割に低下して、日本米輸出の対象となる潜在市場である短粒種需要は総量で670万トン程度にとどまろう。^(注3)

(注3) ジャポニカ米の主要需要国を、台湾 (米消費量50kg、短粒種割合0.9)、香港 (40kg、0.2)、シンガポール (80kg、0.1)、中国 (78kg、0.3)

第2表 主要輸出国における日本産米の販売状況

	輸出量 (2007年)	小売価格 (参考：現地産米価格) (日本品種)	日本産米の販売状況	米の消費動向
台湾	450トン	約600～1,300円/kg (現地産日本品種 約300～400円/kg 米国産加州米 約300円/kg)	・日本産米の銘柄が浸透しており、「新潟コシヒカリ」が人気。 ・10種類以上の産地銘柄の日本産米が日系百貨店を中心に販売されるなど、産地間での競合が激化。	・1人当たり米消費量は約50kg。 ・消費量の8～9割が短粒種。 ・自国産米に対する誇りも強く、ブランド米も存在。
香港	218トン	約800～1,500円/kg (中国産日本品種 約160円/kg 米国産日本品種 約800円/kg)	・高級日本食レストランからの需要が徐々に増加。 ・産地間の競合が顕在化。	・1人当たり消費量は約40kg。 ・消費量の8～9割が長粒種。 ・中国産、ベトナム産中・短粒種は日本産米の1/10、加州産米は1/5程度の価格
シンガポール	92トン	約750～1,000円/kg (中国産短粒種 約50～200円/kg 米国産日本品種 約400～500円/kg)	・市場に浸透しつつあり、売上は拡大傾向。 ・購買層は、華僑や欧米人を中心とした富裕層。	・1人当たりの消費量は約80kg。 ・米は全てを輸入に頼り、タイ産の長粒種が大きなシェアを占めるが、近年は中国産の輸入が増加。
米国	41トン	約800～1,000円/kg (現地産短粒種 約150～170円/kg 現地産日本品種 約200～400円/kg)	・日系スーパーでの販売及び通信販売が中心。 ・販売はやや苦戦しており、かなりの在庫を抱えている業者も存在。	・1人当たりの消費量は約10kg。 ・消費の多くは、国内産長粒種。 ・西海岸地域は中・短粒種の需要が大きく、米消費が浸透。
中国	74トン	約1,400～1,500円/kg (現地産日本品種 約140～200円/kg 米国産短粒種 約1,000円/kg)	・イベントや広報活動を通じた話題性や希少性が評価。 ・購買層は、富裕層が中心であり、贈答用需要が相当程度を占めている模様。	・1人当たり消費量は約100kg。 ・消費量の2～3割が短粒種。 ・南方は長粒種、北方は短粒種の消費が大きい。

出典 農林水産省(2008a)

とし、米消費量・短粒種割合について、前3国は各年の人口比で加重平均し、09年は前3国対中国の比率を2対1、2020年は1対1として加重平均して求め、各年の富裕層人口を乗じて求めた筆者による概算試算。

(3) 日本国内産地における取組み

農林水産省の「農産物等の輸出入取組事例22年度版」によれば、全130件中、米輸出を行っているのは12件で、内訳は直接の産地から遠い全農、秋田県貿易促進協会を除くと農協6件と福井県経済連、農家1、農業生産法人1、米卸1となっている。

輸出先は、ほとんどが台湾で8件、次いで香港3件、中国(全農)、マレーシア(JA西びわこ)、ポーランド(JAたいせつ)で、

このうち台湾、香港双方に輸出しているのが2件(秋田県貿易促進協会、福井県経済連)ある。

販売先では、現地の高級スーパー、百貨店への輸出が5件、バイヤーや輸入業者への輸出が3件、業務用にも仕向けているのが2件(宮城県の農業生産法人(有)PFTサービス=バイヤー経由、北海道の丸ヨ住吉商店)である。また米の品種では、いずれもコシヒカリ等の高級品種を輸出品目としており、低農薬栽培等の安全・安心を前面に出したのも3件ある。

輸出数量では、全農の122トンを除くと丸ヨ住吉商店(JAたきかわ分を含む)が53トンでトップに立ち、次いで(有)PFT

サービスが約44トンとなるほかは、いずれも2～4トン程度にとどまる（数量未詳のものを除く。福井県経済連は約6.3トン。09年度＜全農は07年度＞）。

これらよりも大きく扱っているのが米卸の(株)神明で、2010年度に日本産米輸出を09年度の4倍の1,200トンに拡大するとしており、内訳は、秋田県産あきたこまち800トン、新潟県産コシヒカリ220トン、富山県産同180トンで、すしなど日本食の人気が高い欧米、東アジア、豪州の需要増に対応し、現地の食品問屋を通じて和食レストランや量販店などに売り込むとしている。

この取組みは、輸出用米が「新規需要米」（生産調整にカウント）として扱えるのを活用し、秋田県A農協、新潟県B～D農協、富山県E農協と供給契約を結んで対応するもので、転作助成（2万円/10a）後の加工用米水準程度の価格が目途となっている（E農協では、転作助成後の米粉、加工用米と共同計算される）。

A農協では、08年産から取組みを開始し、10年産では84経営体の133.6haで作付けされた。輸出の選択は、①販売力の強化や加工用米対比での価格向上を志向した取組みのなかから（A農協）、②実需との結びつきが求められる米粉、加工用米の作付面積に限度があるなかでその代替として（B、C、E農協）、また③米粉用米の販売価格の低さを回避するために（B、C農協）行われた。輸出数量実績が多いのは香港で、現地の高級スーパーの日本食品売場で販売されており、09年産あきたこまの現地小売価格は、

109HK \$ / 2 kg (567円/kg) となっている。(株)神明では、12年に3千トンとする計画^(注4)をもっている。

(注4) 筆者2010年10月、(株)神明、A～C、E農協ヒアリング、10年6月24日付日本経済新聞記事ほか。

4 中国向け市場の動向

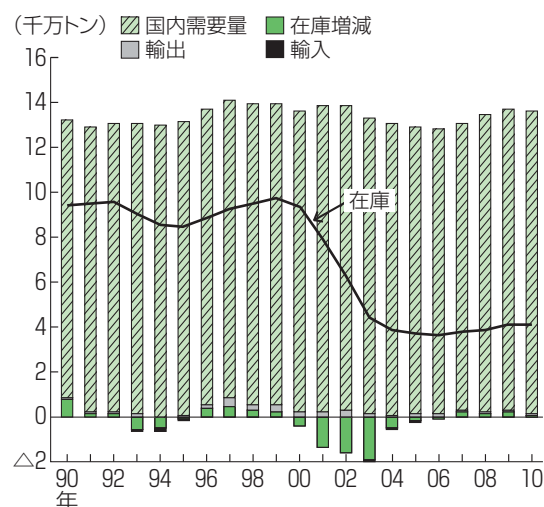
それでは、最大の有力潜在市場である中国市場の動向を、より詳しく見てみよう。

上記のような、現在展開されている限定的な米輸出ではなく、数量的にも本流となるような日本米輸出への発展可能性があるのかどうか検討してみたい。

(1) 中国における輸入米の推移

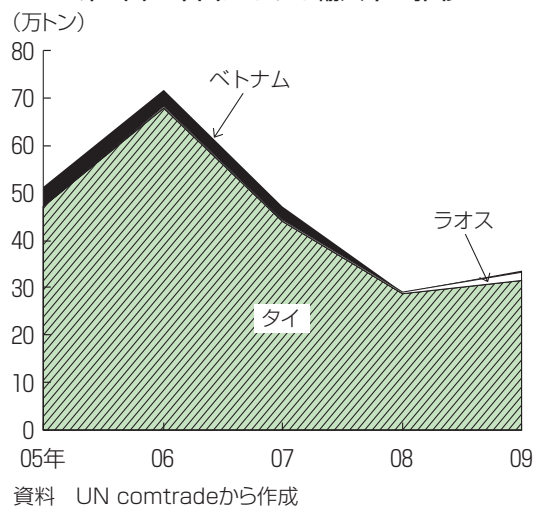
まず始めに、中国における米の全体需給が長期的にどのようなになっているかを確認しておこう。中国は1997年に食糧自給を達成したが、米に関してはそれ以降も国内需

第2図 中国の米需給状況推移

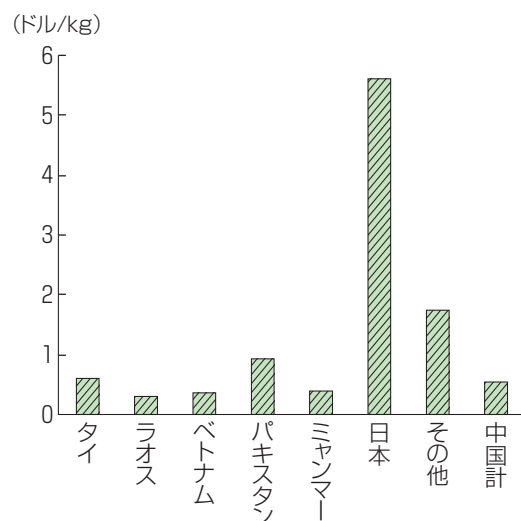


資料 USDA PSD onlineから作成
(注) 棒グラフの正の値(長さ)から在庫減・輸入を控除したものが国内生産量となる。

第3図 中国における輸入米の推移



第4図 中国の国別米輸入単価(09年)



要量約1億3千万トンに比すると僅少なが、およそ年間30万トンの輸入を継続してきた（第2図）。

近年における輸入動向を、輸入先国と輸入単価で見ると、輸入はそのほとんどがタイからのものとなっている（第3図）。輸入単価は、中国全体で0.53ドル/kg、タイ米0.61ドル、その他主要4か国米がすべて1.00ドル/kg未満のなかで、日本米は5.60

ドル/kgと突出している（第4図）。日本が高品質、高価格米を輸出していることが貿易統計上でも確認でき、価格が中国全体の輸入単価の10倍近いことが分かる。

また、精米輸入が77%と最も多いが、碎米18%（タイ米）、もみ4%（ラオス）、玄米1%（94%がラオス米）も含まれている（UN comtrade）。

なお、米は中国における関税割当対象品目で、関税割当数量は年間532万トン（短粒種266万トン、長粒種266万トン）、枠内関税率は1%であり、そのほかに輸入増値税（いわゆる付加価値税）が13%かかる（合計納税率14.1%）（農林水産省(2008a), (2009a)）。

(2) 中国における日本産米の評価

農林水産省が(株)富士経済に委託して調査したところによると、日本産米購入経験者における日本産米購入前の日本米の喫食経験は「レストラン（日本食レストラン等）で食べた経験があった」とする回答（複数回答）がトップで89.0%、次いでほぼ50%の回答率で、「①日本旅行時、②知人・友人宅、③店舗サンプル、④知人・友人等から贈答」が並ぶ。「購入前に食べた経験なし」は1.0%であり、日本米の実食経験がその後の購入に結びついている可能性が高い。日本米輸出においてサンプル試食等の販売促進活動が重要であることが分かる。

米を購入する際に重視する点は、①「味覚、おいしさ」95.0%、②「香り・風味の良さ」83.0%、③「健康面での良さ」78.0%、④「安全性、安心さ」74.0%と続き、

「産地，ブランド」は50.0%にとどまった。中国における米の購入選好では，品種銘柄ではなく，「五常米（黒龍江省）」などの産地によるブランド米が一般的とされるが（農林水産省（2008a）），日本産米購入経験者間では「味覚，おいしさ」を重視する回答率が高いことに留意する必要がある。とはいえ，日本産米購入前の日本産米に対するイメージは，①「香り・風味がよさそう」83.0%，②「安全で安心して食べられそう」71.0%，③「おいしそう」61.0%と続くことから，回答者が日本の産地・ブランドに詳しくないことが，購入時点の重視点で「産地，ブランド」の回答率が50.0%にとどまった要因とも考えられる。

日本産米を食べた後の味覚に関する評価では，「非常においしいと思う」が65.7%，「おいしいと思う」が29.3%（単数回答）と，極めて高い評価となっている。また，同様の総合的な評価に関する回答でも，「非常に良いと思う」52.5%，「良いと思う」38.4%（同）との高評価を得ている。一方で，日本産米の価格に対する評価は，「非常に高いと思う」21.2%，「高いと思う」23.2%（同）と，おいしさや総合的な高評価の反面，それと対比した価格面に関する納得感の低さも際立っている。日本産米の購入許容価格は第3表のとおり，「50元未満/2kg（1元=13.5円で，338円/kg）」が65.8%，「50～100元/2kg（338～675円/kg）」が23.4%（単数回答）と，実際の小売価格である約1,500円/kgの4分の1～2分の1の水準が求められている。

第3表 日本産米の購入許容価格

(単位 人, %)		
	該当人数全体	構成比
50元未満/2kg	104	65.8
50～100元/2kg	37	23.4
100～150元/2kg	9	5.7
150～200元/2kg	5	3.2
200～250元/2kg	3	1.9
250元以上/2kg	-	-
合計	158	100.0

出典 農林水産省(2009a)

(注) 日本産米が高価格で購入を断念した者の日本産米の購入許容価格。

日本産米の購入目的は，「自宅で食べるため」99.0%，「贈答用のため」67.0%（複数回答）と，贈答需要が主であるとする一般的な見方とやや異なる結果となっている。日本産米の贈答相手は，「友人・知人」85.1%，「（別居の）親・親戚」（複数回答）となっており，「ビジネス上の関係者」31.3%を大きく上回った。

また，日本産米の購入契機となった情報源は，①「インターネット」61.0%，②「テレビCM」41.0%，③「新聞・雑誌記事」35.0%（複数回答）となっている点が注目される。

なお，日本産米購入経験者の属性は，性別は女性が64.0%，職業は会社員が88.0%，居住区域は①「上海市内及び近郊」69.0%，②「北京市内及び近郊」30.0%，同居人数は「3名」70.0%，世帯収入（月収）は①「1万5千元～2万元」46.0%，②「1万元～1万5千元」24.0%，③「2万元以上」23.0%となっている（中国都市部の平均月収は約2,435元（中国国家统计局2008年））。

（注5）2009年3月に行われたインターネットによ

るWEB調査であり、調査対象者は20～60歳の男女で、過去2年以内に日本産米の購入経験のある100名、および、日本産米の購入経験はないが、短粒種の購入経験のある545名。

(3) 中国における流通実態と小売動向

前掲第2表のとおり、中国における日本産米の小売販売価格は約1,400～1,500円/kg（8万4千～9万円/60kg）と、現地産日本品種約140～200円/kgの約10倍、現地在来種50～100円/kg（3千～6千円/60kg）と比してはその約15～30倍と高価であり、高価格品を扱う店舗に限定して販売されている（農林水産省（2009a））。もっとも、筆者が09年10月に調査したブランド米産地である黒龍江省五常市の米集荷・精米企業（米ブローカー）では、北京での小売価格を40～116元（524～1,520円）/kgとしており、中国の一部高級ブランド産地の高品質米の小売価格は日本産米に近いものもある。なお、前述のSBSにおける中国からの輸入米価格が高いのは、それらが東北3省（黒龍江、吉林、遼寧）で生産された対日輸出用の高品質銘柄米であることによるものである（佐伯（2003））。

農林水産省が（株）富士経済に委託して

^(注6) 調査したところでは、日本産米の販売は上海エリアを中心とした売上が好調な店舗と、北京エリアを中心とした売上が不調な店舗に大別された。上海エリアの在住者は北京エリア等の他の地域に比べて日本滞在経験者も多いことが要因として考えられている。

調査対象5店舗の取扱品種は、新潟コシヒカリと2店舗で宮城ひとめぼれが加わる。商品単価は、新潟コシヒカリ198元/2kg（1,337円/kg）、宮城ひとめぼれ188元/2kg（1,269円/kg）であり、前記の全農による第1便輸出24トンの販売単価と考えられる。各店舗の月商は、1,980元（10袋）～約39,600元（200袋）となっている。

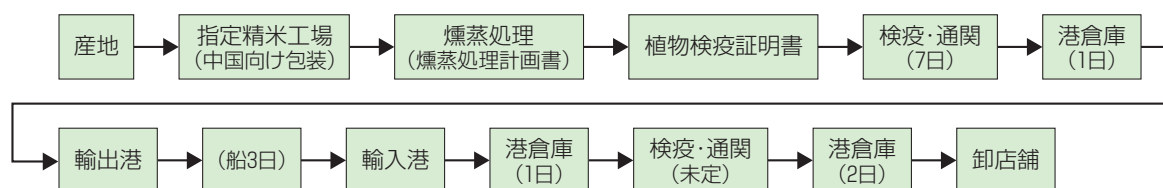
^(注6) 2009年8月に行われた小売企業5店舗に対するインタビュー調査で、日本産米の取扱状況についてヒアリングしたもの。

(4) 中国向け輸出米の価格構成と日本の輸出価格

対中日本米輸出の輸出入手続きフローの概要は第5図のとおりであり、輸出入に係るコストもこれに沿って発生する。

農林水産省（2009b）が行った中国向け輸出米の価格構成試算は第6図のとおりで

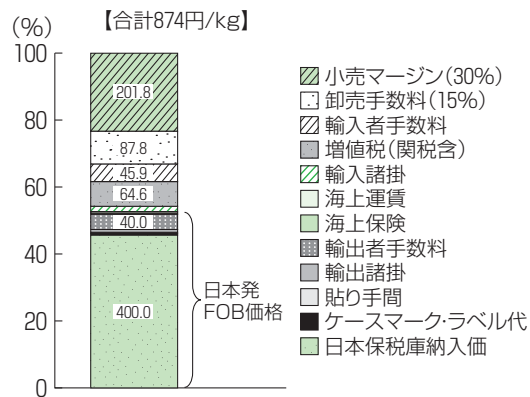
第5図 対中日本米輸出の輸出入手続き



出典 農林水産省(2009b)

(注) 日数は、現地小売店・飲食店までの所要日数(祝祭日は除く)の目安。

第6図 中国向け輸出米の価格構成(試算)



出典 農林水産省(2009b)から作成

(注) 1 数値は、1kg当たりの単価(円)。

2 2kg5袋入りケース(0.01536m³)を、神戸から上海に海上20フィートコンテナ(混載)で輸出した場合の試算。

3 元の換算レートは1元=13.5円。

4 これ以外に精米、燻蒸費用がかかる。

あり、精米、燻蒸処理費用を除く日本保税庫納入価を400円/kgとすると、輸出者手数料40円等を加えた日本発のFOB価格は453.7円/kgとなる。これに、海上運送費用(海上運賃、海上保険料)5.5円を加えた中国着のCIF価格は459.2円となり、枠内関税1%と増値税13%(合わせて14.1%, 64.6円)を上乗せした税込輸入価格は523.8円となる。中国側輸入諸掛15.2円と輸入者手数料(CIF価格の10%)45.9円を加えた中国港倉庫出荷価格は584.9円となり、この時点で既に、出発点である日本保税庫納入価400円の1.46倍に達する。

これに、中国国内の卸売手数料(中国港倉庫出荷価格の15%)87.8円が乗ると672.7円、さらに小売店マージン(店着価格の30%)201.8円が加わった中国国内小売価格は874円となり、日本保税庫納入価400円から見て2.19倍となる。

この試算の対象となった日本米の日本国

内での希望小売価格は550円/kg(3万3千円/60kg)なので、中国国内小売価格はその1.59倍となる。また、日本の輸出価格(FOB453.7円/kg)との対比では、中国国内小売価格は1.9倍となる(CIF価格でも同様)。

ここで、前述したSBS米における中国輸入精米の輸入価格が1万円/60kg(玄米ベースでは9,300円弱)程度に上昇してきたことをとらえて、生産調整を廃止して9,500円/60kg程度の米価水準が実現されれば対中米輸出を行えるとの議論を検討してみよう。9,500円というのは全銘柄落札加重平均の(財)全国米穀取引・価格形成センター指標価格水準のことと思われ、ここでは高品質米ではなく平均的品質米の輸出が想定されている。この場合、仮に日本保税庫納入価を9,500円+精米・燻蒸費用等(10%増)の10,450円(174.2円/kg)とすると、中国国内小売価格はその2.19倍の22,886円(381.4円/kg)となる。この価格水準は、中国における現状の「現地産日本品種約140~200円/kg」の2~3倍に相当し、競争力を有するには至らないとみるのが妥当であろう。

もちろん、日本産米が中国国内でより一般化して中国の卸・小売マージンが低下することも考えられる。しかし、仮に試算の3分の2の水準(卸売手数料10%, 小売マージン20%)に低下したとしても、日本保税庫納入価が9,500円+精米・燻蒸費用等(10%増)の10,450円(174.2円/kg)であれば、中国国内小売価格はその1.93倍の20,119円(336.1円/kg)となり、中国産米価格との乖離幅は依然として大きいものといえよう。

ちなみに、前掲第3表が示す日本産米購入許容価格は「338円/kg未満」が最も多いが、これは高品質銘柄米に対するものであり、平均的品質米に対するものではないことに留意する必要がある。

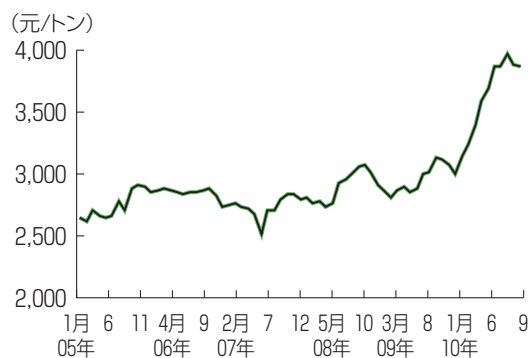
(5) 中国におけるジャポニカ米の生産動向

最後に、日本産米に対して品質・価格競争力のあるジャポニカ米の生産可能性があるか、または逆に、一般的な中国産ジャポニカ米価格が同質の日本産米価格まで上昇していくかどうかの観点から、中国におけるジャポニカ米の生産動向を、主に河原(2010)を参考に見ておこう。

ジャポニカ米の生産量等は、近年「中国食糧発展報告」等の政府系刊行物で示されるようになった。07年の生産量は5,296万トン（精米ベースでは3,707万トン）であり、これは米総生産量の実に28.4%を占める。ジャポニカ米生産量の内訳は、東北3省（黒龍江、吉林、遼寧）で45.8%、南方産地の江蘇省が29.2%、これら4省で74.9%とほとんどを占め、黒龍江と江蘇省で傾向的に増加している。

ジャポニカ米の中国国内平均卸売価格の推移は第7図のとおり、05年初めには2,600元/トンであったが、06年には2,900元に上昇し、08年以降には小幅の上下を繰り返した後、10年に入ってから急激に上昇したが、それでもその水準は4,000元/トン（52.8円/kg）にとどまる。この要因は、09年の大幅減産によるものと考えられる。

第7図 中国国内産ジャポニカ米卸売価格推移



資料 中華糧網数据中心ホームページから作成
(注) 晩生ジャポニカ米の中国国内平均卸売価格。

ジャポニカ米の粗収益は、価格と単収の上昇によって、過去10年程度の間に傾向的に向上してきた。07年では916.4元/ムー（1,374.6元/10a）で、01年の631.3元/ムー（947.0元/10a）の1.45（価格は1.35）倍となっている。なお、生産費統計上の価格（農家庭先出荷価格）を求めると1,783.2元/トン＝27.6円/kgと極めて低い。実際、筆者が09年10月に調査したブランド米産地である吉林省德恵市の米ブローカーでは、農家からの買取価格を2.04元（27.5円/kg）としていた。ジャポニカ米生産の収益性はインディカ米よりも高く、これは価格と単収がともに上回っていることによる。しかし、ジャポニカ米の所得は500.7元/ムー（751.1元/10a, 07年）だが、所得率はインディカ米よりも劣る。これは、生産費が化学肥料費、農業機械費等において高いためである。また、ジャポニカ米の生産費は07年では671.8元/ムー（1,007.7元/10a）となり、01年の464.1元/ムー（696.2元/10a）の1.45倍となっている。この間に生産費率は73.5%（01年）から、価格上昇による粗収益の増加に伴い

06年（66.2％）に向けて低下したが、生産資材価格の上昇により、07年には73.3％に戻った。

米生産に対する国家の支援は、①04年から全国的に実施されるようになり、年々増加している「農家補助金」と、②「最低買付価格制度」で構成される。最低買付価格制度は、食糧流通の自由化と価格下落で農家が生産意欲を低下させ、03年に食糧生産が落ち込んだことから講じられた施策であり、米の市場価格が一定の基準価格を下回ったら国家が基準価格で市場買支えを実施するものである。10年2月に引き上げられたジャポニカ米（国標3等モミ米）の基準価格水準は、2.1元/kg（精米に換算すると3.0元/kg＝39.6円/kg）と低いが、07年には235万トンの買付実績がある。

5 今後の展望

現在の日本米輸出は、政府の支援も受けつつ限定的に行われている。主要海外市場の小売価格帯は1,000円～1,200円/kg（6万～7万2千円/60kg）と極めて高く、日本品種等の現地産米価格の2～7倍となっている。こうしたなかで、輸出用米を「新規需要米」として扱い高品質銘柄米を安価に仕入れる（株）神明と5農協の取組みは注目されるが、価格の目途となる転作助成後の加工用米価格による所得は、主要な転作作物のなかで最も低く（23万円/10a、農林水産省試算）、転作問題の救世主とはなり難い。

いずれにしろ、日本米輸出が今後本流と

なるような発展を遂げるか否かの問題は、①この価格帯程度で日本産米を恒常的に購入する富裕層が、その国の経済発展等によって今後どのように増加するかということ、②主要海外市場の現地産ジャポニカ米や日本品種米の価格が、その国の経済成長等によって、品質を伴いながら今後どのように上昇するかということ、および③日本産米の価格が今後どのように推移するかということの複合要因の帰趨にかかっている。

②のアジアを中心とする主要海外需要国の現地産ジャポニカ米や日本品種米の価格と品質の上昇・向上の見通しに関しては、日本のポストハーベストの処理・対応力を含む農業技術力の高さ、安全・安心に関する信頼度の優位性は、引き続き高く維持されるものと考えられる。価格は、その国の経済成長にあわせて上昇するとも考えられるが、大規模なジャポニカ米の国内生産のある中国でも、少なくともこれまではジャポニカ米価格は中国国内需給要因による上下はあったが、経済成長に連動した上昇はなかった。中国の新5か年計画（2011～15年）案では、経済発展と歩調があった家計収入の増加がうたわれているが、農業部門では農家補助金（面積当たりの作付け直接補助金や生産資材補助金等）と最低買付価格制度等の複合政策によるものと思われ、直ちに価格の大幅上昇に結びつくものとは考えられない。価格を大幅上昇させれば、中国の米の枠内関税率は1％と低いことから、輸入米の大量流入を惹起し、食糧自給をおびやかすからである。

③の日本産米価格の今後の趨勢は、本稿の検討対象とはしておらず、別途の研究にゆだねることとなるが、もし稲作の持続性、再生産性を保障した上で生産調整の廃止が可能であって平均価格9,500円/60kg程度の米価水準が実現されたとしても、前記4(4)のとおり、中国国内小売価格はその日本保税庫納入価である10,450円の1.9～2.2倍の20,169円(336.1/kg)～22,886円(381.4円/kg)となり、中国産日本品種価格である約140～200円/kgとの乖離幅は依然として大きいものといえよう。

(注7) 政府の支援は、輸出環境の整備や販路開拓、新規需要米として取り組む場合の生産調整カウント等の間接的なものを中心となっている。

(注8) 河原(2010) p.49-53。

(注9) 2010年10月28日付日本経済新聞記事。

おわりに

以上、現行の限定的な日本米輸出の動向と、今後の発展可能性について特に大きな潜在市場である中国を中心に検討してきた。アジアの富裕層は今後確実に増加し、ジャポニカ米需要も一定程度増加するものと考えられる。それに伴って、中国を中心とするジャポニカ米や日本品種の生産量も

増加しようが、日本産米の品質の優位性は維持される一方で、その相対的高価格性も持続されるものと思われ、限定的輸出が容易に本流へ移行するとは考えにくい。そして、輸出価格の対現地産品比較劣位は、稲作の持続性、再生産性を保障した上での生産調整廃止が万一実現したとしても変わることはないだろう。

<参考文献>

- ・経済産業省「通商白書2010」
- ・農林水産省(2010)「農林水産物・食品の輸出促進対策の概要」大臣官房国際部9月
- ・農林水産省(2008a)「日本産精米の輸出について」総合食料局6月
- ・農林水産省(2008b)「日本産米の輸出状況について」1月
- ・JETRO(2009)『アグロトレードハンドブック2009』
- ・阮蔚(2005)「日本の農産物輸出促進の動き」『農林金融』6月号
- ・阮蔚(2010)「中国・インドの穀物需給動向」『農林金融』3月号
- ・農林水産省(2009a)「中国における主要な米輸入企業の実態及び日本産米の販売動向調査報告書」3月
- ・農林水産省(2009b)「日本産米輸出ハンドブック」
- ・河原昌一郎(2010)『平成21年度カントリーレポート、中国』農林水産政策研究所3月
- ・佐伯尚美(2003)「米輸入問題の総点検」『農業研究』第16号、日本農業研究所研究報告
- ・陳錫文(2010)「中国農業・農村改革の到達点と課題(講演録)」『農林金融』8月号

(ふじの のぶゆき)

